慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 国家なきネーションとしてのスコットランドの消費・再生産と独立の関係理解 |
| Sub Title | |
| Author | 髙橋, 誠(Takahashi, Makoto) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2015 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.80 (2015. ) ,p.94- 96 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成26年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000080-0094 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

う。遍路は「自由なスタイル」,「登山かハイキングの格好をしている」と言われるようになった。一方では，子供や若者が増えてきたともいい，歩いて参る「歩き遍路」をする人たちも再び見られるようになった。ここには健康ブームの影響もみられるようだ。

### 4.　まとめ・考察

篠栗は本四国の「移し霊場」として，凝縮した「意味空間」を形成している。また，人々が暮らしを営む「里山空間」の中に八十八ケ所が点在し，日常と非日常性が連続性を帯びている。寺社や祠が至る所にありながらも，人々が暮らしている生活世界でもある。篠栗は多様な目的を持つ人々をひきつける「磁場」として作用すると言える。体験と信仰，修行と観光という二つの軸を想定してみると，修行と信仰に関わる「修験」，信仰と観光に関わる「巡礼」，観光と体験に関わる「ヒーリング」，体験と修行に関わる「体験遍路」という四つの方向性を設定できる。

「霊場空間」を舞台として，ウチとソトの交流を通による様々な「コンタクト・ゾーンン」が形成され，多様な思想や実践がまじりあう異種混淆な展開が現代社会の特徴である。こうした傾向は篠栗では南蔵院にも顕著にみられる。真正性や非真正性がまじりあい，明確に区別できない中で新たな創造力が発揮されている。「磁場としての篠栗」を，今後もさらに深く探求してみたいと考えている。

# 国家なきネーションとしてのスコットランドの<br>消費・再生産と独立の関係理解

髙　　橋　　誠

### はじめに

2014年度大学院社会学研究科・博士課程学生研究支援プログラムの助成を受け，イギリスからの独立をめぐるスコットランド住民投票が実施された2014年9月18日をはさんで2014年9月15日から20日までスコットランドに滞在し，現地調査を行えたことに感謝したい。

### 1.　研究のねらい・方法

筆者は「スコットランドにおけるナショナル・アイデンティティの政治社会学的考察」(『法学政治学論究』第101号: 231–256に掲載）で，往々にして市民的（civic）ナショナリズムに分類される現代スコッティシュ・ナショナリズムの性格の再検討を行った。そこでは，政治指導者のスコットランド（人）理解と国民のそれとの乖離が存在することを明らかにし，現代スコティッシュ・ナショナリズムを単純に市民的ナショナリズムに分類することの危うさを論じたが，今回の現地調査では独立派の集会（特にグラスゴーのジョージ・スクエアで開かれた集会）に立ち会い，主に独立派のポスター，パンフレット，ステッカー，壁書きなどの観察から，(1）いかにスコットランド性が表象されているのか，(2）ナショナリズムの高まりの政治・社会的要因を探り，現代スコッティシュ・ナショナリズムの性格理解を深化させることを研究目的とした。

## 2. 研究成果

2014年度大学院社会学研究科・博士課程学生研究支援プログラムによる助成成果の一部は「イギリス独立党台頭の政治社会学的考察」(『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要　人間と社会の探求』第79号掲載予定）の第5節にまとめた。一部重複するが改めて記せば，独立派の集会，そこでの演説，ファッション，街中で散見されたポスター，パンフレット，ステッカー，壁書きなどから観察できた独立運動の性格は文化や民族性に依拠したものというよりは，反緊縮財政，反核，イングランドにおける急進右派政党台頭への忌避など，総じて言えば「民主主義の赤字」，つまりスコットランドとイギリス全体の多数政党のズレに由来する民主主義の要求に依拠したものであったといえる[1)]。

ただし，住民投票前日に行われたグラスゴーのジョージ・スクエアでの独立派の集会で独立後のナショナル・アンセム候補筆頭の「スコットランドの花」が，投票翌日にスコットランド議会前でオールド・ラング・ザイン[2)]がバグパイプの演奏に合わせて歌われ，またケリーダンスが踊られる様子を観察するに，独立運動の発展・持続[3)]にはそういった社会的構成文化を媒介にする必要がある点は指摘しなければならないだろう。それは自覚のない排他性を生む／んでいる可能性があり，市民的ナショナリズムという言説は自己言及的であると言えなくもない。今回の現地調査では以上のような知見を得ることが出来た。

## 3. 今後の課題

アラン＝G・ギャノン（Gagnon 2011＝2015: 5）はスコットランド独立派は以下の三原則に基づいてナショナリズムの新モデルと提示し，人々の動員に成功したとする。それは（1）エスニシティではなく領域を強調，（2）よそ者を迎え入れること，（3）反緊縮財政と再分配による連帯の主張という三原則である。今回の現地調査では以上三原則に基づく独立運動を観察することが出来たといえる。ただし，一定の留保が必要であるのは上述した通りである。

筆者が考えるに，おそらくスコットランドにはイギリスにおけるマイノリティという立場を脱却，つまり国民国家形成を目指すナショナリズムと，スコットランドの中のマイノリティ（移民など）に対するナショナリズムという2つのナショナリズムが存在しており，反中央政府という共通目的においてはエスニシティではなく地域性に基づいていたナショナリズムが（Hussain and Miller 2006），状況によっては，排他的なナショナリズムに転化する可能性がある。改めて，これが留保の必要性の意味するところである。排他的なナショナリズムの転化が何に起因するのか，それは独立達成なのか（Hearn 2014），あるいは転化が杞憂に終わるのであれば，排他的なナショナリズムを抑制する要因は何なのか検証する必要があろう。それは，反緊縮財政とプログレッシブな社会政策（の主張）かもしれない。こういった点に関して，さらなる検証をしていきたい[4)]。

もう一点，近年，世論調査では軒並み3割程度を推移していた独立支持が住民投票時には約半数（44.7%）まで伸びた理由は，Mooney（2015）が主張するように社会運動として独立派のキャンペーンを捉える視角が不可欠であり，筆者のこれまでの研究はそれに欠いていたと考える。

最後に2015年5月に実施されたイギリス総選挙でスコットランドのイギリスからの独立を党是とするスコットランド国民党がスコットランド59議席中56議席を占めるという選挙結果は周知の通りであろう。これが何に起因するのか研究の余地が大いにあるだろう。ただ，今回のスコットランド住民投票は賛成あるいは反対するにしろ，対面的なやり取りあるいはSNSを通じてのコミュニケーションにしろ，

メディアの受容という受動的な形態あるいは運動への能動的な参加という形態にしろ，スコットランド住民の相互作用を促進し，その結果としてスコットランドという社会が前意識化されるに至ったことが，上述した選挙結果を生んだ要因の一つであることは論を俟たないのではないだろうか[5)]。

### 注

1）　髙橋誠（2015）第5節の写真①からは民主主義の赤字の解消，②からはイングランドでの急進右派政党の台頭とイギリスのEU脱退への懸念，③は認識しづらいが反核の横断幕を確認できる。
2）　蛍の光の原曲。詩は国民詩人ロバート・バーンズによるもの。
3）　ネーションの再生産とも言えるかもしれない。
4）　マルチ・ナショナル国家（multinational state）における多文化的ナショナリズム（multicultural nationalism）に関する研究はまだ少ない。Kymlicka（2011）はスコットランド，ケベック，カタルーニャなどにおけるシティズンシップ政策の4つの可能性を提示している。
5）　ただし，スコットランド国民党の議席数の急増が必ずしもスコティッシュ・ナショナリズムの高まりを意味するのではないという点は留意する必要がある。Eichhorn（2015）を参照。

### 参考文献

Eichhorn, J. 2015, “There was no rise in Scottish nationalism: Understanding the SNP victory”, The London School of Economics and Political Science, British Politics and Policy, May 14, 2015（Retrieved May 15, 2015, http://blogs.lse.ac.uk/politicsandpolicy/there-was-no-rise-in-scottish-nationalism-understanding-the-snp-victory/）.

Gagnon, Alain-G., 2011, *L’âge des incertitudes. Essais sur le fédéralisme et la diversité nationale*, Ouébec: Presses de l’Université Laval.（＝2015, 丹羽卓訳『マルチナショナル連邦制　不確実性時代のナショナル・マイノリティ』彩流社）.

Hearn, J. 2014, “Nationalism and normality: a comment on the Scottish independence referendum”, *Dialectical Anthropology*, 38（4）: 505–512.

Hussain, A., and Miller, W. 2006, *Multicultural Nationalism: Islamophobia, Anglophobia, and Devolution*, Oxford: Oxford University Press.

Kymlicka, W. 2011, “Multicultural citizenship within multination states”, *Ethnicities*, 11(3): 281–302.

Mooney, G. 2015, “The 2014 Scottish Independence Referendum—The YES campaign as a social movement”, Open Learn, March 2, 2015,（Retrieved May 20, 2015, http://www.open.edu/openlearn/people-politics-law/politics-policy-people/the-2014-scottish-independence-referendum-the-yes-campaign-social-movement）.

髙橋　誠，2014,「スコットランドにおけるナショナル・アイデンティティの政治社会学的考察」『法学政治学論究』第101号: 231–256.

————，2015,「イギリス独立党台頭の政治社会学的考察」『人間と社会の探求』第79号掲載予定.

# 発達障害児早期発達支援のための Train–the–Trainer（TTT）モデルの検討

松　崎　敦　子

## 1．問題と目的

応用行動分析に基づく早期支援は，発達に遅れのある子どものさまざまな領域の発達を促進する（Centers for Disease Control and Prevention, 2014）。応用行動分析は，個人と環境との相互作用を「先